

聖書日課 『からし種』 2024.6.23-6.30

<p>6月23日 (日) イザヤ 16章</p>	<p>「彼は公平を求め、正義を速やかにもたらす」(5節)。当時モアブはアッシリアの攻撃にあつて、避難民がユダに流れ込んできていた。そんな中、5節に救い主の預言が記されている。力のある者が力のない者を虐げるといふ世の中にあつて、やがてメシアがあらわれて、彼が公平、正義を打ち立てるといふ預言である。主による正義を祈ろう。</p>
<p>24日 (月) イザヤ 17章</p>	<p>「見よ、ダマスコは都の面影を失い／瓦礫の山となる」(1節)。当時はダマスコは立派な町であるが、そういう姿を見ながらイザヤはダマスコがやがて滅んでしまうことを預言した。彼は時の動きの中に神の御旨を知ることができた。それは、現実の中に神への道を絶えず見出そうとしたのだろう。神の御旨を求め、主イエスの助けを祈ろう。</p>
<p>25日 (火) イザヤ 18章</p>	<p>「角笛が吹き鳴らされたら、聞くがよい」(3節)。クシュから来た使者はアッシリアに対して小さな国々が同盟を結んで、自分たちを守ろうと考えた。彼はユダにも反アッシリア同盟に加わるよう説得した。だが、神がアッシリアを裁かれる時が来る。「角笛が吹き鳴らす」とはアッシリアの裁きの時を意味している。全てに神の時がある事を覚えたい。</p>
<p>26日 (水) イザヤ 19章</p>	<p>「アッシリア人はエジプトに行き、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人とアッシリア人は共に礼拝する」(23節)。敵対関係にあつた国同士が共に礼拝する時が来る。イザヤは「どんな人も神の御愛の内にある」のを見せられたのであろう。主イエスは敵のためにも十字架にかかられた。全ての人たちが主を礼拝する時が来る事を切に祈りたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2024.6.23—6.30

<p>27日 (木)</p> <p>イザヤ 20章</p>	<p>「腰から粗布を取り去り、足から履物を脱いで歩け」(2節)。 神からイザヤへの言葉は「裸、はだしで歩け。」という命令だった。彼は三年間もこの状態で歩き回った。これはエジプトとクシュの国は、やがてわたしがしているように裸になって捕虜として連れて行かれるという預言。エジプトやクシュに頼るのではなく、神にのみより頼むべきだ。</p>
<p>28日 (金)</p> <p>イザヤ 21章</p>	<p>「倒れた、倒れた、バビロンが。神々の像はすべて砕かれ、地に落ちた」(9節)。バビロンの国が滅びるなどとても考えられない時に、突然神の裁きとして実現するという幻を預言者イザヤは見た。恐ろしい神の裁きという暗闇の中でも、朝がやってくる。神の義が示される希望の朝。イエスキリストを仰ぐ時に喜びの朝が来るのだろう。</p>
<p>29日 (土)</p> <p>イザヤ 22章</p>	<p>「しかし、お前たちは、都を造られた方に目を向けず／遠い昔に都を形づくられた方を／見ようとしなかった」(11節)。神の前に悔い改めず、ただ現状だけがうまくいったと酔いしれている人たちを見て、イザヤは心を痛めた。やがてアッシリアの軍隊に囲まれる時が来ることを預言した。神の前に正しく立つことが大切だ。心に刻んでおこう。</p>
<p>30日 (日)</p> <p>イザヤ 23章</p>	<p>「しかし彼女(ティルス)の利益と報酬は、主の聖なるものとなり…主の御前に住む者たちの利益となり…」(18節)。海外貿易で豊かな富を得ていた港町ティルスは、アッシリアにより滅ぼされてしまう。が、滅びを通して「主の聖なるもの」とされる新しいティルスをイザヤは語る。人間の栄光ではなく神の栄光を求めていく時、人々の心に賛美があふれていく。</p>